

安楽寺だより

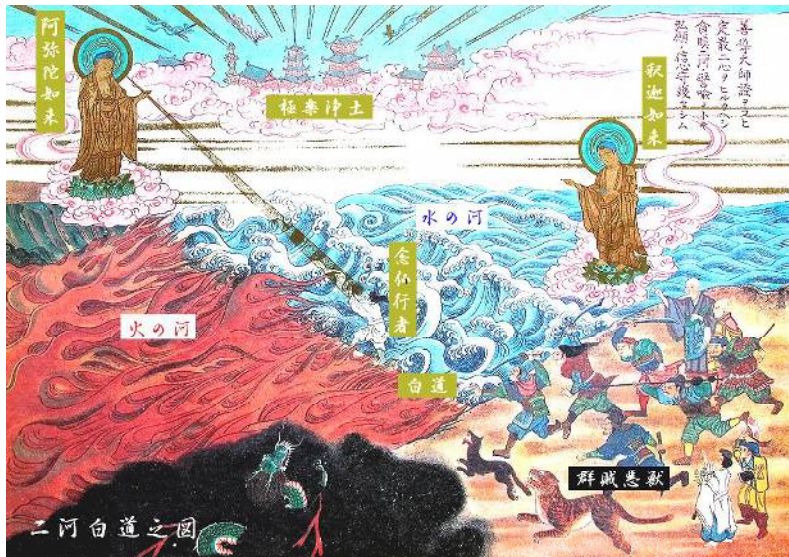
第40号

紙面内容

- 2面 秋季永代経法要を勤める
- 3面 八事霊園墓地で秋彼岸法要
- 4面 日本仏教史補足 鎌倉時代①

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良
 名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
 電話 〇五二(八四一)二六〇六

二河白道のたとえ—終わりに—



苦を縁として、道が開かれる

「二河白道のたとえ」を十三回に亘って述べてきました。仏教はお釈迦さまの教えから始まり、二千数百年の時と多くの先達のご苦勞のお陰で、私たちの処まで伝えられてきました。仏教は、何か神秘的な世界を顕していると思いがちですが、仏教の本質は、人間そのものを明らかにする教えです。

善導大師の「二河白道のたとえ」は、私たちの苦悩するところが、未来を開く扉であり、苦悩を機縁としてこそ生きたべき道が開かれるという、仏教の教えを人間生活の中に拓いた妙釈と言えます。

第二に、「二河白道のたとえ」は、『一切の往生人等に白さく』(浄土へ往生しようとして願っているすべての人びとに申し上げます)の言葉から始まっています。

私たちは、人生の行き詰まりを感じ、悩みます。生きようとすればするほど、出口のないことに気がつきます。しかし、仏さまの教えに出会い、その智慧をいただければ、出口のなさにはわが思いの狭さゆえと知らされ、観点の変更、つまりこれまでこのようにしか見えなかったけれども、教えに照らされてみれば、実はこのように見直すことが出来るというところの翻り、それが起こるのも人間なのだと思わされるのです。

そして自分自身を深く信じ、あらゆる存在がごとごとく尊重すべき光を持ち、

二河白道の本贈呈します
 ご教示いただきました大江憲成先生の本を贈呈いたします。ご希望のかたは、安楽寺までお申し出ください。

生命を持っている極楽浄土の世界を示されています。

第三に、「二河白道のたとえ」は、自力の修行で悟りを得ようとしていたものが、その不可能を知り、まことの信を得て浄土に往生しようと願うところが説かれています。

それは次の文にあります。
 『自ら思い定めるのでした。私は引き返したら死ぬ(肉体の死でなく空過を意味する)またこのままどまっても死ぬ、前へ進んでも死を逃れることは出来ないだろう。いづれにしても死ぬほかないのであれば、私はこの白道を尋ねて前に歩んでいこう。すでにこの道あり。必ず渡ることが出来る』と自覚するところです。

(2面につづく)

秋季永代経



九月十三日、秋季永代経法要をお勤めしました。新型コロナウイルス感染拡大のため、春の法要は中止致しましたが、今回は感染防止の対策をして、午前中の法要を行いました。

ご参詣の皆様の間隔を取り、窓を開放して換気し、入口に検温カメラを設置した本堂で読経する中、亡き方々を偲び、ご焼香をしていただきました。

「生まれはじめしより さだまれる定業なり」

その後、榎山正樹師（教西寺住職）のご法話をお聞きしました。

「新型コロナウイルス感染拡大という現在の状況は、過去を振り返るとたびたび発症していることがわかります。蓮如上人ご在世の十五世紀末の一四九二年（延徳四年）に書かれた『疫癘（えきらい）の御文』には、次のお言葉があります。

『当時このごろ、ことのほかに疫癘とてひと死去す。これさらに疫癘によりてはじめて死するにはあらず。生まれはじめしよりしてさだまれる定業なり。さのみふかくおどろくまじきことなり・・・』と述べられています。

「仏教の教えは、人間の生き方・あり様を明らかにすることが核心と言える教えだと思えます。この世に誕生したことが因であり、老い・病などが縁となって、死という果があるという『生まれたるものは必ず死す』との普遍的なもの、道理を説かれたのです。

「ある同行にこの御文の話をしたら、「何か冷たく感じるな」と話された。確かにそうで

（1面からつづく）

「苦悩の中で、その人生の意味を見いだすことです。「空過」（むなしく過ぎてゆくこと）を克服することが、人生の根本的課題でありますと、善導大師が示されたところがこの「二河白道のたとえ」のおはなしの核心の教えであります。

この「二河白道のたとえ」のおことばを、改めてお聞きになりたいと思われましたら、お申し出ください。これまでご教示いただきました大江憲成先生（九州大谷短大名誉学長）の本を贈呈いたします。

ある。今のコロナ禍の状況でこの言葉に頷くことはなかなかむづかしい。

「今日皆様が寺の法要にお参りいただいたことは、日常過ごす生活とは違い、与えられた日々をどう生きていくかを考えるという宗教的感性による宗教的行動なんです。

人として生まれた意味を知り、老・病・死の『さだまれる定業』を受け止め、世間の状況に振りまわせられない毎日を過ごしてほしいと願われているわが身です。

「この蓮如上人のお言葉に出会い直しをしているわたしです。そして、一日も早いコロナ感染の終息を願っています。」

報恩講にお参り下さい



昨年11月の報恩講法要

今年も十一月十三日に、報恩講をお勤め致します。真宗門徒にとつて最も重要なこの仏事は、お念仏の教えとともに九十年の生涯を尽くされた親鸞聖人を深く偲んで、毎年本山や末寺で連綿と続けられてまいりました。

聖人が「ただ念仏を申す」生活をお勧めなされるのは、教えを聞き、私自身が「煩惱具足の身である」と、ここから領き、思い通りにならない一生を大切に生き抜く力をいただき、人間として生まれた本当の願いを気づかせていただくためです。

安楽寺では、報恩講を勤める前に、お世話の方の皆様がここを込めて仏具のおみがきをいたします。

そして、お供えのお華束（おけそく）は、米粉を蒸すことから始め、花びらを型どったお供え物に仕上げるまでには、十数人の皆様方が、分担して手際よく作業されて、出来上がります。皆様のその姿には、頭が下がります。お勤めは、正信偈・念仏・和讃を丁寧にお勤めいたします。

ご法話は、荒山信師（恵林寺住職）にお願ひいたしております。

コロナ感染対策をしっかりと行なってお勤めいたしますので、是非ご参詣ください。



須弥盛のお華束

九月十八日、八事霊園安楽寺墓地で、秋彼岸法要をお勤めしました。穏やかな天気です、早朝よりご門徒の皆様に参加頂きました。十時三十分からの永代供養墓には、五十名を越す皆様がお参りされ、お勤めする中、彼

秋彼岸墓法要を勤めました



岸に往生された亡き人を偲び、ご焼香していただきました。法要の様子は安楽寺会館にオンラインで同時中継し、十数名の皆様にお参りいただきました。

ご参詣誠にありがとうございました。

仏教豆知識

第四十回

日本仏教史

補足④鎌倉時代

鎌倉時代の代表的仏教者に法然上人源空（一一三三〜一二一三）がいます。源空は十三歳で比叡山にのぼって天台教学を学び、十八歳の時、比叡山の別所黒谷で叡空に師事して仏道の修行をされました。

この頃源信の「往生要集」を学ぶかたわら、南都に留学して阿弥陀仏の本願を基調とした善導大師の浄土教に接しました。以来、源空は、善導の「観経疏」から弥陀の本願に対する真意を証得して、専修念仏の道に帰入しました。

山の吉水に居を移して民衆を中心に伝道され、その教えは非常な勢いで広まりました。

このことは、旧仏教教団を刺激して、南都・興福寺の衆徒の訴えにより、一二〇七年（承元元年）朝廷は、専修念仏を停止、安楽・住蓮など四名を死罪、源空・行空・幸西・親鸞などを流罪に処しました。その後一二二七年（嘉祿三年）の法難によって、源空の墳墓は破却され門弟も配流になり、法然教団は打撃を被りました。

しかし源空の専修念仏の教えは、貴族から庶民までのあらゆる階層に信仰され、門弟によって各地で発展しました。現在宗派として残っているのは、浄土宗鎮西派（弁長）、浄土宗西山派（証空）そして親鸞聖人の浄土真宗です。



法然上人

一一九八年（建久七年）源空は「選択本願念仏集」を撰述し、本願念仏の仏教こそ真実の仏教であり、一切の衆生救済のため大乘仏教の立場を明らかにして、いかなる者でも救われていく専修・易行の教えを示しました。源空は、比叡山黒谷から京都東

今の新型コロナウイルス感染状況はどうですか？と聞かれた時、マスクの着用や消毒・換気などの感染対策は定着してきたようですが、どこか不安を感じます。▼現状をどう見たらいいのでしょうか。また市民の皆様はどのようにお考えでしょうか？それを知る手がかりが市女性会の会員アンケート（今年七月実施）にありました。▼感染拡大の危機感を持った時期は、市内最初の感染者発表（二月十四日）と学校への休校要請（二月二十七日）が多くありました。▼調査項目の「感染について思うこと」には、「ワクチン・治療薬の完成を願う」意見が多くある一方「相手を思いやる気持ち」を常に持たたい」「医療従事者への感謝の気持ちをもって日々を送りたい」「災害時同様に協力し合い・助け合って乗り越えていくしかない」など、他人を尊重する意見を回答する人が多く心強く思いました。今後、情報に惑わされることなく、体調に充分注意して毎日を過ごしましょう。